

本會設立廿五周年記念邦文論纂

要旨紹介

本會研究所員 溝 口 駒 造

本論文は本會の創立廿五周年記念出版の日本文化史論纂に盛られた諸名家の論文要旨の紹介である。同論纂は菊版七〇〇有餘頁の大冊なるを以て讀者の便宜を慮つて、特に其要旨紹介を左に試みるものである。此要旨は多く執筆者の自作原稿なるも、中には本研究所にて作成せるものもあり、又或事情に由り、特に紹介を略した向もある。讀者諒焉

(一) 「あそぶ」の語義について

臺北帝國大學教授 安 藤 正 次

國語の「あそぶ」の語義については、「遊び楽しむ」といふのがその本義であり、それが轉じて、音楽・歌舞を演奏する義ともなり、平安朝時代には、「あそぶ」といへば、歌舞管絃についていふことと解せられるやうになつたといふ舊説に對して、「あそぶ」は、本來鎮魂の行事としての歌舞をいふ語であつて、それが轉じて樂器を用ゐるものについていふやうになり、野山に狩をすることをまでも、この語であらはずやうになつたといふ新説が起つて來てゐる。しかし「あそぶ」といふ語の、古文獻における用例をみるに、「あそぶ」が「およぐ」「狩をする」等の義に用ゐられたと思はれる例はあり、それらは、漢籍の字注や古書の傍例によつても證せられるが、前記の新説に見えてゐるやうな語義は、

古書に典據を見出し難い。

(二) 明治天皇の御信仰と國體宗教たる皇教

京都帝大名譽教授
工學博士

青柳榮司

凡そ世界の國家形態には、王道國家・霸道國家・民道國家等種々あるが、其中にあつて我日本のみは獨り皇道國家であつて、肇國以來萬世一系の君主を現人神と信じ仰ぎ奉り、世界無二の國體宗教即ち私の所謂「皇教」を國民の全部が奉じて特色ある歴史を作り上げて來て來てゐるのである。そして此の皇教は明治維新の初に於て祭政一致の御制度として、又、大教宣布の詔として現れてゐる。此の詔勅並に御制度は長くも 明治天皇御敬神御崇祖の御觀念の現れであつて、其後の數々の御製や御詔勅にも一貫して拜せられる所である。我々は此の 天皇の御聖旨を常に奉戴して、國體宗教たる皇教の實踐に努力せねばならぬと信するものである。

(三) 栗田栗里先生と大日本史

文學博士 深作安文

水戸藩で編修された大日本史には四種の範疇がある。本紀・列傳・志・表が其れである。志は我が日本の物質的並に

精神的文化の實相を明かにし、治亂興廢の由來を知らしめるもので、之が完成を見なければ修史の事は終つたと云へない。故に水戸藩の史學者は殆ど其全力を盡して當つたが、而も容易に成業し得なかつた。最後に現れて安政五年に水戸の彰考館に入り、大日本史編修の事業に關係して之を著しい進捗に置くと同時に志類の完成に拍車を加へたのは即ち博士栗田寛一栗里先生であつて、刑法志(明治四年)兵志(明治六年)佛事志・職官志(明治十五年)氏族志(明治十六年)禮樂志(明治十七年)食貨志(明治二十一年)神祇志(明治二十五年)陰陽志(明治二十八年)の九志は何れも先生の手に最後の補訂が加へられ、各括弧内の年に朝廷に獻せられたものである。此の大日本史完成に偉功ある先生は明治三十二年に歿せられたが、遺子勤ツトが父の志を繼いで遺稿を整理し、最後の國郡志も明治三十九年に朝廷に獻せられて遂に十志の全部が完成したのである。

(四) 日本書紀編纂に關する一考察

東京帝大講師 原 田 敏 明

日本書紀編纂以前に、何等かの前行的編記が爲された事は明白であるが、それが何ものであるか又は如何に日本書紀と關係するかは知られてゐない。それで後世の學者は種々の説を立てゝゐるが、其の中で注目すべきものは河村秀根の説であらう。彼は 天武天皇元年までの記述と其後の記述とが、各別の撰者の手に成つたものと見てゐるのである。そこで實證的に調べて見ると、天武天皇紀と 持統天皇紀とは、記述事例の大きな相違變化が見られる。それは記述の形式・内容は勿論、用語の相違に於てさへ證示せられるのである。要するに、日本書紀の完成は養老四年五月頃であら

うが、而も 天武天皇の御代が其編纂に重要關係を持つ事は十分に認めねばならぬ所であると思ふ。

（五） 儒教と祭祀

東大名譽教授
文學博士 服部 宇之吉

支那の儒教では、戦争と祭祀とを國の大事として重視した。祭祀とは神人の靈を祭る事である。祭祀は（一）報本反始（二）祈禱（三）拂禳の三に別れる。報本反始は天地を生の本として感恩の誠を致す事であつて、何等の祈求をも意味しない。而して天神地祇を祭る事は天子諸侯の特權に屬する。社稷の語は其の地祇を祭る事から生ずる。（二）次に祈禱は吉福を神に求め（三）拂禳は、來らんとする災禍を避け又止めんことを祈求するにある。祭祀の對象は天神・地祇・人鬼であつて、人鬼は人靈を意味する。従つて支那人は靈魂の不滅を信じ、死後は送葬までの或期間平常の如く食物を供し、葬式後の祭祀には、祭主が嚴重なる齋戒後、神前に食を供し、神靈は降つて之を食ふと信ぜられた。廟は即ち平素斯かる神靈の姿を止める處であつて、正寝即ち表座敷と相對する位置に建てられた。而して禮部は總て祭祀を掌る國家重要な官である。

（六） 道徳的感情の養成

本會々長
文學博士 林 博 太郎

本會々長伯爵林博太郎博士によりて稿せられたる論說で全篇六節より成る。第一節「概念」に於ては、今日の文化は

必ずしも勸善懲惡の實を擧げて居ないが、常に我等の良心は勸善懲惡を要求して居るが故に、善に喜悅を伴ひ、惡に苦痛を感じるものなる事を明かにし、之を道德的感情と稱すと定義し、第二節「善惡の起原」に於ては、凡ての現代文化の道德的環境は習慣として體驗せられ、その環境の下に道德的判斷力は養はるゝが故に、兒童も相當の年齢に達すれば、行爲の善惡は直觀し得らると述べ、進んで善惡兩者の性質に就て、功利論と形式論とを對比し、第三節「道德法の成立」に於ては、低級の動機に動かされたる行爲が次第に高級の動機に動かさるゝに至つて、人は利己的方面から解放されて道德的・倫理的に淨化さるゝに至る所以を力説し、第四節「良心」に關しては、我等の行動・云爲の動き及び結果に對し、道德的感情に依て爲す自己判斷を以て良心となす旨を定義し、之よりして良心その者の性質及び内容に入つて敘説し、第五節は「兒童の道德的感情」を解説するに當り、幼兒の行爲は善惡の標準に依て律すべきではなくて、寧ろ命令的權威に依て律すべきものなる事を述べ、尙ほ兒童が道德感情の發展に最も有害なるものゝ一を虚言に於て代表し、これ自己保存に重大なる關係を有するものなるが故に、教育の任にあるものは其の指導の宜しきを得て、他方に兒童の虚言に對する恐怖心を利用し且つ喚起する必要があるを敘説し、第六節「教育的意義」は正に本篇全節の結論であつて、兒童の正義に對する精神的不安定を矯正せんが爲めには、強大なる道德的感情を扶殖するの必要ある所以を敘し之が爲めには學校教育に先だつ家庭教育こそ、兒童の生涯を通ずる道德的基礎となる重大性あるを強調し、兒童が學校教育を高め行くに従つて、修身・公民・國史・國文等の教材によりて漸次に道德的知見を確立するを得べきであるが、其の實行力を具備せしむる爲めには、正に道德的感情を必要とするを以て、指導者たるものは此點に向つて猛進せざるべからざるは勿論、事の此處に出でしむる爲めには飽く迄、教師對生徒間に以心傳心的感情の交換がなければならぬと論

結してある。

（七）古今集序に於ける業平の批評と業平の作品との關係

東京帝大教授
文學博士

久松 潜 一

紀貫之は古今集序の六歌仙論に於いて、「在原業平はその心あまりて詞たらず。云々」と批評してゐる。「心あまりて」といふ批評は正しいが、しかし「詞たらず」との評は適當でないやうに思ふ。古今集には業平の歌が三十首（嘉祿本或は定家本、元永本三十二首）あるが、それを大別すると、前期の作と思はれる情熱のあふれた歌と、後期の情熱はあるがそれが沈潜して理性的となり平明な表現をとつた歌とに分けられる。貫之の評はその前者に加へられたものと思はれるが、これは業平が詞を十分に表現し得なかつたのではなく、寧ろその情熱を表現するのに最もふさはしい詞もしくは形式をとつたのであるから、これを「詞たらず」と評するのは不適當である。詞の歌人であり、趣向の歌人である貫之は、情熱の歌人である業平の表現を正しく理解し得なかつた、もしくは同感し得なかつたので、そこに業平と貫之との歌風乃至傾向の相違がある。若き日の業平は色好みであつたが、後半生に於ては、その情熱がすゝんで親子夫婦の愛、主君に對する無限の愛となり、又國家に對する愛となつた。さういふ點で業平は純粹愛の歌人、情熱の歌人であり、又同時に最も日本的の歌人であつたといつてよい。

(八) 日本精神と武士道

文學博士 本多辰次郎

(一) 日本精神は勿論外來思想を交へなく、日本人に固有で又永久に繼續すべき精神であるが、靜動の兩方面がある。靜的方面は國體精神で、忠・孝・和の三綱、敬神・尙武・養正の三徳に攝在する。動的方面は日に月に發展する文化で他の長を取り、能く咀嚼し、同化するを長所とする所の寛大なる精神である。

(二) 武士道は矢張日本人の間に、平安鎌倉兩時代に發達大成せられた所の武士階級の間の道德であつて、節儉・武勇・忠節・名譽・信義等を重んずることを信條とし、其の他、物のあはれを感じ、優美溫雅の情緒を尙ぶなど、美點は頗る多い、實行上結構な道德である。

(三) 他の事は皆結構であるが、忠節の一點は時に不都合を生ずる恐れがある。併し日本精神の忠は太陽の如く、武士道の忠は惑星の如く、其の光を還元して見れば、陽光に收まるので、元來日本人の血や肉まで精神と共に發動する所にあるので、陛下に對する忠は本、主人に盡す忠は末である。其の本末を誤らぬ様、取捨するを要する。

(九) 琉球神道の火の神に就いて

前沖繩圖書館長

伊波普猷

琉球では内地の上古の信仰と同様に、火の神を女神と考へ、普通「火の神がなし」「おかまがなし」又上品な言葉では

「御三つ物」といふ。後者は石を三箇に形に鼎立させた原始的な竈を火の女神のよりましとする所から起つた名稱で、琉球では火の神は元海から上つて來たといふので、海岸或は河岸の石を拾つて來て、それを火の神のよりましにする。作物其他一家の事に關する祈願は火の神を先にし祖靈を後にする程重要視され、分家する時には、本家の火の神の香爐中の灰を少し分けて新しく火の神を祭る。他家の火の神を拜むことは禁物である。所によつて異なるが、舊曆十二月二十四日、或は毎月晦日に、火の神が昇天して天帝に一家で起つたことを報告するといはれてゐるが、これは道教から來た俗信で、明の初、所謂閩の三十六姓が琉球に歸化し、その教權を握つた以後、火の神の信仰も次第に道教化した。

(一〇) 味噌の起源は滿洲に在りとの考

文學博士 金澤庄三郎

味噌は我國の食品中最著名なるものの一つであつて、其名は東洋諸國の間に喧傳せられ、今日では支那朝鮮にもないものであるから、我國の特産の如く考へられてゐるが、本來は支那でいふ醬 (sauce) の一種であつて、大豆から造るものである。最初朝鮮から傳はつたから高麗醬とも呼ばれ、本名は未醬と書いてミンと唱へ來つた。今普通に味噌と書くのはこの音を寫したものに過ぎない。未醬の二字は朝鮮で新羅時代から用ひてゐたもので、今日では *un-jeon* といふ語となつて残つてゐる。昔の朝鮮は其領域が滿洲の一部に及び、滿洲はまた有名な大豆の産地であるから、味噌の原産地を滿洲にまで溯ることは當然といへよう。滿洲語で醬を *jeon* といふのは即ち味噌の原語である。支那には諸種の

醬はあるが味噌に該當する語はない。日鮮滿は其主語の系統を同うし、文化の交換も亦古代から頗る盛なものがあつた、味噌も亦其中の一つで、而も今日では其製造は鮮滿共に振はず、獨り我本土に於てのみ隆盛を極めて居るのである。

(一一) 慈雲尊者の神道

本會研究所長
文學博士

加藤 玄智

(1) 神道とは何ぞ

慈雲の神道の中核——「神道は一箇の赤心、君臣の大義なり」

(2) 神とは何ぞ

慈雲の出發點——(一) 神者聖而不可測之稱 (二) 神は無極にして萬物の形體より以上に坐すを以ての故に神は上なり (三) 萬有神教的

(3) 神佛關係

慈雲——神即佛、佛即神。本體的に佛、現象的には神

(4) 國體觀

支那印度も及ばぬ萬國無比——一系神皇が特色

(5) 反對學派批判

本會設立廿五周年記念邦文論纂要旨紹介 (薄口)

山崎闇齋を駁す。大祓祝詞の道德的解釋

（一二） 天道教の他宗教より受けたる要素

會 員 金 孝 敬

云ふまでもなく天道教は崔濟愚に依つて創始された朝鮮獨特の民族宗教なのである。今より約七十年前に開宗せられたものであるが、その間第二祖崔時亨、第三祖孫秉熙を経て今日の衆議制に至つてゐる。その教義は儒教、佛教、道教、回教等の諸要素を取り入れ、よく調整渾和せしめた處に特色がある。これは勿論當時本教の發生期に周圍に之等諸宗教が輻輳してゐた關係であるが、又一方これら何れの宗教も眞に朝鮮民衆の精神の粗たり得なかつた事に起因するのである。依つて教祖崔氏は誠心誠意これ等を修得し遂に天啓を受けて一宗を創立したものである。

其の主なる教義並びに實踐要綱としては、天主を拜み呪文を唱へ祈禱を行ひ、待日と云うて日曜日の勤修を行ひ、誠米と云つて教徒としての義務行爲を持つのであるが、これらは何れも儒教、基督教、道教等々の影響に依るものが多いのである。又布徳と云つて開宗年より新しい紀元の暦を用ふるのであるが、恰もマホメット教の Hejira 暦の如くで、回教の影響と見られる點もあつて、然もよく朝鮮化させた點等興味ある朝鮮研究に見逃すことの出来ない必要缺くべからざる宗教である。

(一三) 國語とアイヌ語との關係

東京帝大助教授
文學博士

金田 一京助

半世紀の昔、チェインバレン教授は十五個條の證據を擧げて、日本語とアイヌ語とは全く系統の異なる言語であると論じた。しかしその後この説を支持した者もなく、又、それに反對した者もないから、こゝに聊か所見を開陳する次第である。

チェインバレン教授は、

第一に、日本語は後置詞だけであるのに、アイヌ語は澤山の後置詞の外、二つの前置詞の“to” “towards”及び“from”を有する、といふ。ところがアイヌ語は、主語・目的語（又は補語）・動詞の順を採り、動詞が最後へ来るから、前置詞があり得ないこと國語と同様で、これは名詞の前へつけて、「へ」及び「から」の關係を表はす接頭辭である。しかしかうした語法は國語にはないから、兩國語の異なる證據とするには異論がない。

第二に、アイヌ語の後置詞は、日本語と違つて屢獨立に用ひられる、といはれる。これは實は、アイヌ語が國語と違つて、一々の動詞に人稱區別のある言語であることに氣が附かれなかつたためであるが、しかし此を以て兩國語が違ふとされた見解には賛成である。

第三に、アイヌ語には形式的接頭辭の使用があるが、日本語にはそれが無い、といふ。これは重要な發見である。

第四に、アイヌ語では真正の所相^{ゴシク}を頻りに用ひるが、日本語にはそれが無い、といはれる。これも真正の所相が頻り

に用ひられるといふ點は誤りで、實は餘り使はれないのであるが、所相の形態を取る動詞が他動詞のみであつて、自動詞にないことは、歐羅巴語式で、日本語と違ふところである。

第五に、アイヌ語には非常に多くの再歸動詞があるが、日本語には一つもない、といふ。日本語にも或意味の再歸動詞がないではないが、再歸代名語を語頭に接続して造る再歸動詞はない。

第六に、日本語には代名詞が澤山あるが使用は稀で、人稱代名詞とはいふが、實は飾り詞に過ぎないけれども、アイヌ語のは真正の代名詞である、といふ。茲にチェインバレン教授が代名詞といはれるのは、動詞の頭へつく人稱接辭にほかならないけれども、それが日本語と違ふといふことには異論がない。

第七に、アイヌ語の第一人稱代名詞には、「格」の使用の痕跡が存する、といはれる。これも實は代名詞ではなく、人稱代名詞的接辭の目的格活用であるが、甚だ重要な示唆である。

第八に、アイヌ語の動詞の活用には複數があるらしく見える、といはれる。これは第一類動詞即ち他動詞に對する第二類の動詞を云ふので、これに第一種（單複同語幹）第二種（單數の語尾の母音を去り、*yo*を附けるもの）第三種（單數 \dot{y} で終るものは、その \dot{y} を \dot{y} に直す）第四種（單複全然ちがつた語幹を用ひる不規則性のもの）と四種あり、かやうな活用は日本語の動詞と全く違ふところである。

第九に、日本語の動詞の活用語尾には歐洲語の曲折に似た性質があるが、アイヌの動詞にはかういふ活用がない、といはれる。これには少しも異論がない。

第十は、日本語の動詞には連結による變形があるが、アイヌ語の動詞にはこんな變化がない、といふので、これにも

少しも異論がない。

第十一に、日本語には、古代語にも現代語にも、文語にも口語にも敬語法があるが、アイヌ語には、普通の丁寧な語以外には敬語法がない、といふ。しかしアイヌにも文法的な敬語法があつて、第一人稱複數包括形が、第二人稱に轉用され、又第三人稱複數を單數に使用すると敬語になるのであるが、その構成は日本語と異つてゐる。

第十二に、日本語にはラ行で始まる語はないが、アイヌ語には澤山ある。

第十三は、日本語では各格の代りに屬格を盛んに用ひるが、アイヌ語にはこんなことはない、といふのであるが、これはアイヌ語にも無いのではない。

第十四に、否定法が全然違ふ、といはれるが、これも正當である。

第十五に、アイヌ語の數詞の構造は特殊なものであつて、十進法の日本語の數詞とは全然違ふ、といはれる。これは最も重要な發見である。

かやうに、チェインレン教授の擧げられた十五個條の中には、教授が未だ氣がつかなかつた點や、又説明の不十分の點もあるが、しかし日本語とアイヌ語とが系統の異なつた言語であるといふ斷案は、今日尙依然として據ぐところがないのである。

(一四) 仕事の心理

日本勞働科學研究所員
文學博士

桐原葆見

人間は凡て活動を求める心に燃えてゐる。此の欲求が仕事の推進力である。併し乍ら仕事をよく持續する爲には、仕事の最後の高遠な目標が確に把握せられ、その達成への努力が作業者の喜びとならねばならぬ。従つて又、其の仕事の持つ意義と使命とが確認せられねばならぬ。そこで之が爲には従業者に形而上的な考察をする資料と能力との與へられることが必要である。是等の諸點に於て、吾々の祖先が、仕事に對しては勿論、其の用具にさへも神聖性を認めてかつた其の考へ方と態度とは學ぶべき多くのものがあると思ふ。今日の職業人の教育に關係を持つもの、又は工場企業者等は、是等の點について、將來幾多の反省と工夫とを要するであらう。

（一五） 明治以前に於ける紀記の研究

廣島文理大教授
文學博士

清 原 貞 雄

古事記及日本書紀の研究は、明治以前に於ても相當盛んで、既に一種の考古學的研究さへ起つてをつたが、これは勿論稀なことで、一般には、古代史の根本資料としての古事記及日本書紀を、文獻的に研究するのが主であつた。即ち古典そのものゝ研究が主であつた。

我國に於ける古典研究は朝廷に於て行はれた日本紀の講述に始まる。即ち 嵯峨天皇の弘仁三年六月三日、紀廣人、阿倍眞勝等十餘人に命じて日本紀を讀ませ、多人長をして執講せしめられたのが初である。これは奈良朝時代には比較的容易に讀むことが出來たが、年と共に段々讀み難くなつたので、特に日本紀を講讀する必要を朝廷で感じられた爲で

あらう。

以來日本紀の講述は屢々行はれた。これは月に何回と日を定めて、一年乃至三年の間繼續して行はれたもので、通常神代卷の講述に止まつたが、稀に日本紀全體に就いての講述も行はれた。それを筆記したのが日本紀私記といはれるものである。それによると、當時の研究は、文字又は用語の檢索が主であつて、稀には、ある事柄を前後の事件と對照して研究することもあつた。そして、それが終ると盛大な宴會を催し、天皇も臨御遊ばされて、席上各日本紀の中の何かの事件に就いて和歌を詠むのが例であつた。その和歌を集めたのが、日本紀竟宴和歌と稱するものである。

以上は朝廷に於ける古典の研究であるが、鎌倉時代になると、民間にも古事記や日本紀の研究をする學者が現はれる様になつた。即ち卜部兼文・懷賢父子がそれがあつて、兼文には古事記裏書、懷賢には釋日本紀の著がある。

古事記裏書は、古事記の記事を日本書紀・舊事紀・風土記等と對照したもので、又釋日本紀は、禮記・史記・玉篇・文選・説文等支那の諸書を參校し、古事記・舊事紀・延喜式・風土記・和名抄等を參照して、平安朝時代の研究を集大成したものである。

次に吉野朝時代になると、忌部正通の日本書紀神代口訣が出来た。これは神代卷に註を施したもので、神代卷の語句を、主に漢籍と參照して解釋し、傍ら一種の神道的見解を加へたものであつて、寧ろ神代卷によつて正通自身の神道説を述べたものと見るのが適當である。

室町時代に出来た一條兼良の日本書紀纂疏も、亦神代卷を解釋したものであるが、これは漢籍ばかりでなく佛説をも引用し、神代口訣と同じく、矢張り兼良の神道説を述べたものである。

又この時代には、平安朝以來永らく絶えてをつたところの、日本書紀の講讀が行はれた。即ち 後土御門天皇の文明十二年には吉田兼俱が、天文二年にはその子清原宣賢が日本書紀の講述を命ぜられたことが文獻に見え、その折の筆記も残つてゐる。しかしこの時の講述は平安朝時代のそれと違つて、いづれも神代卷に據り各自の神道説を立てたものに外ならない。

尙近代發見され本會より出版された釋聖罔の日本書紀私抄は、應永十三年に出來たもので、内容はさう大したものでないが、文教の廢たれたこの時代に、然も僧侶の手によつてかゝる研究が行はれたといふ點で、深い意義をもつものである。

ところが徳川時代になると、各種の學術研究が盛んになるにつれて、古典の研究も亦自ら盛んになり、多くの學者が現れたのであるが、殊に著しいのは復古學派の擡頭である。新井白石は、古代史の研究には古代國語の力を借りねばならぬといひ、古代國語の研究に努力し、下河邊長流・僧契沖などの國學者は、古代國語そのものゝ研究を目的として、茲に古代國語の研究が勃興した。そしてこれは、荷田春滿、賀茂眞淵等によつて次第にその範圍を擴げられ、遂に本居宣長に到つたのである。宣長が古事記を研究し古事記傳を著したのは、單に古代史の研究が目的ではなく、古代國民の精神即ち御國心を明かにするのが目的であつた。そして宣長が從來あまり顧みられなかつた古事記の價値を認めて、大著古事記傳を著したことは、後の學者に大きな影響を與へたが、これに對して日本書紀の研究も亦非常に盛んとなり、谷川士清の日本書紀通證、河村秀根の書紀集解、橘守部の稜威道別、鈴木重胤の日本書紀傳等が著はされた。

(一六) 閻齋學の出發點

東京帝大講師
文學博士 小林健三

山崎闇齋は日本の學を以て君臣の大義を説き、天下に綱常を扶植して明治維新の魁を爲した學者であつて、其の學の骨髓は朱子學と神道との統合の完成にあるが、此の學者の根本素養を培うたものは實に宋學であつて、佛敎を排撃し、之を死を以て踏み越えて、之に代るべき信念を築き上げようとする彼れ一流の決死の努力は、實に宋學の精神の中から發してゐるのである。此の意味に於て私は、正保四年、彼が三十歳の時に著作した『闢異』の一卷を以て、近世排佛思想史上の記念すべき大著と認め、闇齋學が、其の出發點に於て既に朱晦庵に髣髴する烈々たる精神に燃え輝いてゐることを見て、讚嘆措く能はざるものが存するのである。

(一七) 神道の特質に關する研究

國學院大學長
文學博士 河野省三

神道の研究に就いては、道德的、宗教的、政治的、文化的、民俗的、歴史的なる各方面からの考察が可能であり、且つ必要であるが、神道の眞面目即ち最も正しい姿に對する綜合的、根本的な考究は、其の日本民族の特殊なる信念並に

性情の吟味である。本論文は此の觀點からして、神道が皇祖と天皇と國家と祖先とに對する奉仕の念を中心とし、明るく清らかな、生き／＼した氣分を基調としてゐることを闡明するものである。

(一八) 臺灣サイシヤット (Saisiat) 族の神 靈・祭祀並にタブーに就て

臺北帝大助教授 増田福太郎

サイシヤット族は臺灣の北部に居住する蕃族 (One of the Formosan Native tribes) である。

人の生存中の靈を「アヅム」(Avum) とし、人體の頭部と胸部とに宿つてゐる。「夢」(Kashpi) は自己の「アヅム」が外出して見て歩くのである。夢占ひのことを「テシ・ピ」(Teshpi) と云ふが、昔部族の頭目が首狩りの壯圖を決する場合にも又、生死不明の人の行方を尋ねるにも、永久の建築場所の吉凶を判するにも用ひられた。特に「病氣の原因」を知る場合には、夢に現はれた所を更に「玉占ひ」(Runhap) の「巫術」によつて確めたのである。人が死するときには、「アヅム」は「ハウン」(Havum) と稱せらるる靈となる。「ハウン」は、やはり人の形をして居り、そして男女・善惡・力の強弱等の別がある。特に注目すべきは、「ハウン」自體に生死があり、第一の「ハウン」が死んで第二の「ハウン」となることであるが、此の第二の「ハウン」が死ぬと、そのまま消滅してしまふと考へられてゐることである。

被誡首者の、「ハヴン」即ち首の無い「ハヴン」が最も悪性の「ハヴン」であると考へられ、さうして此の「ハヴン」の居る所は地下である。

祖靈のことを「タテネハヴン」(Tatenehavun)といひ、「祖靈祭」(Pasrah)は毎年行はれてゐる。大體、同姓の者が合同で行ふ事になつてゐる。而して此の祭りの祭主の家に限つて、小さい籐製の籠に一個の古い蜂の巢を収めたものを家の棟の中央に吊し、之を祖靈の神位とし、祖靈が之に宿るものとしてゐる。名付けて「サーラン」(Saran)といふ。

彼等の祭祀には祖靈祭の外に(1)「稻播種後祭」(Appiaza) (2)「天氣祭」(Yunol-kapuzao, or Kumanakaran) (3)「防疫祭」(Pinuhe-kavara)等がある。就中、本族最大の祭祀は「バスタアイ」(Pasta'ai)といひ、一年置きに秋を擇んで盛大に行はれて居る。此の祭りは豊年祭に起因し、特に「タイアイ」と稱せらるる矮人種の慰靈祭を兼ねたものである。此の祭儀は、五日間に互つて行はれ、老いも若きも盛装して秋の夜を踊り抜くのである。

「タブー」に相當する語を「ピシメン」(Pishim)といふ。此の語には、汚穢なものとして禁忌するといふ意味はあるが、神聖なものに對して尊敬といふ意味は持つて居らぬやうである。「ピシメン」の所は極めて多いが、法的意味を有するものとしては例へば、姓を異にする者の死體に觸れてはならぬこと、同姓同祖の者が結婚してはならぬこと、姦通を禁じて居る事等々である。なほ本族蕃社内の諸所に見る所有物たる事を指示する「タブー」(蕃稱『ピンチワッサオ』Pinti-wassao)は所有權觀念の原初を示すものとして、興味が深い。

（一九） 武州比企郡竹澤村の諸算者

會 員 三 上 義 夫

竹澤村勝呂すけろに吉田源兵衛勝品かつしほと云ふ算者があり、吉田勝品一代誌を書き遺したのは誠に珍らしく、地方算者の實情を知る爲めの好史料である。勝品は初め父勝吉かつよしから算法を學んだが、文政十年十九歳のとき父の力及ばぬ所を隣村の福田重藏から受け、更に一里計りの小川下宿の富商杉田久右衛門に無理に頼んで至誠贊化流の傳授を得た。而も勝品は福田の傳授に依つて關流九傳と稱して居る。但し其傳系は明らかでない。勝品は百姓仕事の傍ら名主を勤め、土地の檢見、年貢の事などに忙しく、算術教授に専念したのは、維新後に隱居してからである。勝品と同時代に僅か十餘町ばかりの同村木呂子に松本寅右衛門精彌が居つて、上州の算家市川行英の門人であり、文政十三年に武州松山稻荷へ算額を奉納した事もあつたが、勝品は精彌との間には數學上の交渉があつた形跡はない。精彌も關流八傳と稱したらしく、福田重藏が八傳と云ふのも、同じく市川の關係に依るのではないかと想像される。若し然らば重藏は市川よりも約四十歳の年長者であるから、全く老後の學習と云ふ事になる。今の竹澤村地方に於ける算學教授には上州市川行英の關係が重要な地歩を成したと見ねばなるまい。勝品の如きも、直接に市川に師事し、若くは松本との間に關係があつたならば、恐らく學力は遙かに増進する事も可能であつたらう。けれども此等諸算家が輩出して近郷諸村落に算法を指南した功勞は、没すべくもないのである。

(二〇) 諏訪の祭祀

東京帝大教授
文學博士

宮地直一

諏訪神社は日本神社史上特異の存在である。此神社の祭は、(一)在廳官人により(二)特定の祠職の所役として(三)國內領家の所役として(四)頭役によつて營まれたが、最も歴史の古いのは第四のもので、更に其中でも最も古いものは、氏人の氏神祭に起源を有する神使御頭である。其他の頭役は概ね鎌倉時代に發源してゐる。以上四類の頭役は、何れも祭事を主宰して所用經費の全部又は一部を慣例により支出する義務を負擔したもので、神社の財用の上から云ふならば、當時の地方廳には只幣物の一色のみを仰ぐに止まり、其他の諸入費は、悉く一社の支辨にかゝつたと見らるべきであらう。

(二一) 日本諸方言に於ける血縁語彙の展望

宮内省圖書寮
在 勤 宮 良 當 壯

日本國內に現存する血縁關係の語彙を十數年に亙る實地調査と文獻涉獵とに依つて網羅し、之に歴史的・地理的兩方面から語原的説明を與へた。此論文は紙面の都合で、父母・祖父母・伯叔父母・兄弟姉妹・從兄弟姉妹・子・甥姪・孫

曾孫・玄孫等の如き細目的説明を避けて、先づ血液に對する日本人の觀念・民間信仰等から筆を起し、次で日本人が如何に血統を重んずる民族であるかを立證し、進んで、幾多の新資料に依つて、上下を一貫したものは、「血統」、血統内の相互關係のものでは「親類」、自己を中心に上下に分けたものでは「先祖」と「子孫」などを表はす語彙に就て論究してある。本論文では血統を表はす古い日本語の「マケ」と云ふ言葉は、現在、東北地方で盛んに用ゐられて居り、そして、今日のカラ（故）が平安朝時代には「ケ」と云はれた歴史的事實（竹取・源氏所收）及び標準語「讀むカラ」を九州方言では一讀むケ」と云ふ地理的考察などを傍證として、マケの「ケ」は「ウカラ」・「ヤカラ」・「ハラカラ」などの「カラ」の音韻轉化したもので、集團の意味を有し、従つて、「マケ」は本當の血族團體を意味するものであらうと力説してある。此外に血統を表はすバテ、ブリュー、スヂ、チスヂ、スヂメ、スズメ、ヒッポー、ツリ、チール、ミュービキイ [mi:pi:ki] スーキ、タクリ、ソン、マツエー、マツイ等の語彙を擧げ、又親類に關するものには、親類一家、一門、一統などの如き漢語系のもと、オヤコ、オトザ、イトコ、其他の純日本語系のもとがあることを指摘して、詳しく説明してある。蓋し重要な研究新題目であらう。

(二二) 蛭兒説話の由來と其變遷

會 員 宮 坂 光 次

日本の開闢神話によると、伊弉諾・伊弉冉二柱の神が高天原から磯馭廬島へ降つて、其處で諸々の島々及神々を生ん

だといふことになつてゐる。ところがそれらの御子の中で、ヒルコの生誕に就ては、古事記や日本書紀等の編纂される前に、既に異説が生じてをうて、古典には、それを國土生成の先頭に生んだといふ説と、天照大神（日神）月讀尊（月神）及素戔鳴尊（嵐神）の間に入れてゐる説との、二様の傳が存在し、後世の學者は、それらのいづれかに従つて色々の解釋を下してゐる。しかしそれらの説話を種々の點から比較して見ると、ヒルコを日月神及嵐神の仲間に入れて、人間の形態を以て表はしてゐる説話は、他の説話に比して不自然な點が多いから、これはヒルコを國土生成の初に置いた説話の方が、古い型であつたらうと推定される。そしてその説話を上代人の地理上の知識にあてはめて見ると、ヒルコとはまだ獨立した島と看做されない小さな岩礁の如きもので、本來の名義は海潮の干満につれてその姿を隠現させる子即ち洞兒ヒナの意味であつたらう。それが後になると、最初の意味が忘れられて、ヒルコといふ名稱上、人間の形態を以て表はされる御子と考へられ、日月神及嵐神の仲間に入れられるやうになつたと考へられる。

(二三) 江戸文藝に現れたる神道の庶民性

東洋大學講師 溝口 駒造

江戸時代に劃期的旺盛に達した學的・神道が明治維新を喚び起した事は、周知の公認事實であるが、其の底力となつて勤王志士の運動を支持後援したものは民衆の神道思想である。是等の思想は、『平家物語』の琵琶音楽に依る普及、『太平記』の街頭講釋に依る普及の爲に甚だ多く培養されたが、更に之を一層深く民衆の中に徹底せしめたものは、淨瑠璃

戯曲であらう。即ちそれ等の實證は、金平 Kimpira 古澤瑠璃の諸曲、之に續いては大近松の作品、更に其の後を受けた竹田出雲の戯曲に於て指摘せられる。是等の戯曲は學的神道と社會教化工作に協力したのみならず、時としては反對に、學的神道の方向を導きさへもしたのである。

(二四) 日本佛教初渡の年時に就て

大正大學教授
文學博士 望 月 信 亨

日本の佛教は百濟から始めて傳へられたもので、正史たる日本書紀には之を人皇三十代 欽明天皇即位十三年壬申、即ち西紀五五二の十月に起つた事としてゐる。然るに元興寺伽藍緣起並流記資財帳には之を 欽明天皇即位七年戊午十二月の事とし、其他奈良時代の二三の古記録にも亦同説を用ひてゐる。日本書紀の 欽明天皇紀には天皇の在位を三十二年としてゐるので、その在位中に戊午の歲がなく、之を推算して見ると廿九代の 宣化天皇三年即ち西紀五三八年に當るのである。これは書紀編纂の際 欽明天皇の在位年數を九年短縮し、その結果として書紀は新に十三年壬申説を提唱したことに起因するので、實際日本佛教の初渡は元興寺緣起に記する如く 欽明天皇即位七年戊午の歲で、即ち正史に傳へてゐるものより十四年以前になるのである。

此の元興寺伽藍緣起は書紀以前の記録と認めらるゝもので、その記事は頗る信憑するに足るものである。それによりて當時百濟より貢獻した佛像も釋尊誕生の像であつたことがわかり、その他、日本の佛教は最初から皇室の御信仰によ

りて弘通の端が啓けたことも明かになり、此の書の尤も貴重すべきものたるを知るに至つたのである。

(二五) 日英交通の研究に貢獻せし幕末及

明治時代の日英交通史上の三英國

外交官

長崎高商
名譽教授 武藤長藏

幕末から明治の初年にかけて我國に來朝した英國外交官の中、特に日英の交通に貢獻した人が三人居る。それを來朝順に擧げると先づ第一に、サー・エルネスト・サトウ、Sir Ernest Satow、次にウヰリアム・ジョージ・アストン William George Aston 最後にアルゲルノン・ペルトラム・フリーマン・ミットフート Algernon Bertram Freeman Mitford となる。

エルネスト・サトウは三人の中最も年が若く、一八六一年江戸駐在の通譯生に任ぜられて、同年十一月英國を出發、先づ北京に來り翌一八六二年即ち文久二年來朝した。時恰も尊王攘夷の思想最も高潮に達し、時局紛亂を極めた頃であつて、慶應三年長崎に於て起つた英國軍艦イカルス號の水兵殺害事件調査のために、長崎に出張し、外國總奉行中山圖

書頭と接衝、又長州藩の井上聞太、木戸準一郎、伊藤俊輔、或は土佐海援隊の諸士と交渉するなど、色々活動した。それは彼の著 *A Diplomat in Japan* (日本に於ける一外交官) に詳かである。

次にアストンは一八六四年即ち元治元年に來朝し、通譯生として江戸に駐在、後長崎駐在英國領事、兵庫駐在代理領事、或は朝鮮駐在英國總領事等に任ぜられ、一八八六年東京駐在英國公使館書記官となり、一八八九年退官した。その間

A Grammar of the Japanese Spoken Language.

A Grammar of the Japanese Written Language.

Shinto, the Way of the Gods.

Nihongi Chronicles of Japan from the Earliest.

Times to A. D. 697.

History of Japanese Literature.

Hideyoshi's Invasion of Korea (Trans. Asiatic Soc. Jap.)

等多くの著述のあることは、人のよく知るところである。

ミットフ・オートは一八六五年即ち慶應元年臨時北京公使館附書記官として赴任、翌年江戸駐在英國公使館附として來朝、彼のイカルス號水兵殺害事件などに關係してゐる。一八七一年露西亞駐在を命ぜられたが、赴任しないで退官し、一八九二年 Stratford Division of Warwick 選出の下院議員となつた。彼は文學藝術宗教等に造詣深く、語學に優れ

サトウ氏に就いて日本語を學び、僅か一年で日本語に通じ、サトウ氏を驚かしたとのことである。後一九〇六年コンノ
ート殿下の首席隨行員として、特に故エドワード七世陛下に選ばれて來朝、日英の親善に貢獻した。

以上の三人は共に語學的才能が豊かで、外交官に最も適した人達であつたが、これは唯外交上の事務を助けたばかり
でなく、文學藝術宗教等日本の文化を英國に、否獨り英國のみではなく世界各國に紹介したのであつた。過去に於て、
英國がかかる優れた外交官を有したことは、獨り英國の幸であるのみならず、我々日本人としても深く感謝の意を表す
る次第である。

(二六) パーリ佛典と漢譯佛典とに就いて

東京帝大教授
文學博士 長 井 眞 琴

Tri-pitaka 即ち Three Baskets の形になつて現存する Pali Texts が The Great Collection of Texts in Chinese
(漢譯大藏經) に於て如何なる地位を占めてゐるかに就いて述べて見よう。

The Chinese Buddhist Texts はこれより the Mahāyāna Texts と the Hinayāna Texts とに分けらるるが、the Pali
Texts はその後者に相當するもので、支那や日本の Mahāyānists から見ればその價値に於ても低きものと見られてゐる
ものもある。而して其等の Chinese Texts は決して今の Pali Texts の翻譯では無く、全く別種類の Sanskrit Texts
の翻譯であることは明瞭である。

Pali の Tri-pitaka 中の Sutta-pitaka が five nikāya からなつてゐるのはこれに相當する漢譯の Āgama (阿含) が four Āgamas からなつてゐるものよりはその形式に於て Pali の方が新しいことを示してゐるやうではあるが、この兩者の内容を比較して見ると必ずしも然りとは限らぬ。俗信者 (upāsaka) は最初は Buddha と Dhamma と Saṅgha との三寶に歸依するのみであつたのが、後に至つて出家の戒に倣つて五戒を守ることになつたものと思はれるが、Chinese Āgamas では俗信者となれば三歸 (three refuges) と同時に五戒を保つことになつてゐるが如きは漢譯の Āgama は Pali の Nikāya よりは新しいものと思はれる。Pali の三藏の外にあつてしかも極めて重要な二つの佛典がある。一は Milindapañha と Sūtra 漢譯 Nasa-Biku-kyō (Nagasena-bhikṣu-sūtra Nanjio, 1358) 之れと當り、二は Visuddhi-magga と Sūtra 漢譯 Gedatsu-doron (Yimuktimārga-sāstra Nanjio 1293) 之れに當たるのであるが、此等漢譯と Pali との兩本を比較して見ると、漢譯の方が Pali のものよりも古くして原始的の形を保つてゐることは極めて興味あることである。

(二七) 御子代・御名代の意味

京都帝大
助教 中村直勝

古代に於ては未だ歴史記録の術具備しなかつたから 天皇 皇后 皇子 以下 の御業績は子々孫々に口傳口誦されて傳へられた。乍併、若し御子の坐さざる時は之を傳へるに由がないので御子代の民を置いて御業績を後世に傳へしめ、御子

の有無に拘らず御名を負はせた部曲民を望み給ふ事もあつた。それが御子代御名代である。——さうした通説に對して我國に於ける漢文字使用は案外に古く從つて歴史も早くから記録されて居つたと解すべく、歴史を語り傳へる事を世職としたと言はるゝ語部に、さうした世職の在つた確證はない。語部はかゝる國家的歴史的な機能を有したものでなく地方的娯樂的音曲的な機能をしか有たなかつたのではないか。

御名代御子代の「代」は「代り」の意味を有するものではなく、「しろ」は頃（ころ）しろ（しろ）と同じく土地の或る廣さ（地域）を表はす文字であらう。従つて御子代御名代といふのは皇室御料地といふ經濟的な意味のもので、歴史的な存在ではあるまい。

(二八) 明治維新前後の史詩的回顧

東京文理大教授
文學博士

中山久四郎

江戸幕府の末、外には西洋諸國から開國通商を促され、内には尊王攘夷の説が起つて、當時の志士が自國を思ひ國際間に於ける日本の地位を思慮する念が盛んになつた結果、その感情を發露した詩歌の中には、皇紀を歌ひ込み、又「大日本」「日本丈夫」「日本魂」「日本刀」「我が日の本」「日本ごころ」など日本の國號を標榜して世人の注意を喚起するものが多く、自ら「大君は」「大君の」「君のため」「國のため」と詠じて忠君愛國の至誠を表はし、皇道を謹願し國運を奉頌する日本精神的の語句がますます多くなり、勤王愛國の念を高めた研究が盛んになり、本居宣長は從來の學者が

日本書紀を主としたのに對して古事記の重要性を認め、それを客觀的に研究して『古事記傳』の大著を公にした。これに對して日本書紀の研究も多くの學者によつて行はれたが、特に重要なのは谷川士清の日本書紀通證、河村秀根の書紀集解、橋守部の稜威道別、鈴木重胤の日本書紀傳等で、それ／＼日本書紀の内容に就て特色ある研究をしてゐる。

(二九) 悟の心理

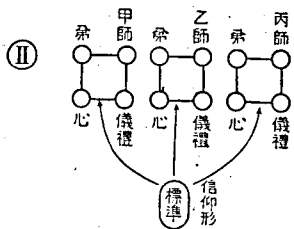
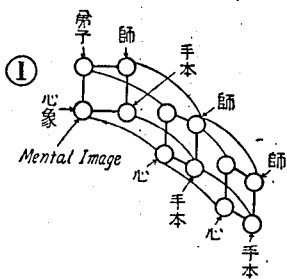
日本大學講師 西澤 頼 應

一、景德傳燈錄、洞上傳燈錄、日本高僧傳、高僧自敘傳等に記載された二千二百九十四人が、悟を開いた時の心境を詩

歌、偈、頌等によりて發表して居る。之れ等を資料として、悟に至るまでの意識、悟の後の宗教的態度について研究した。

二、悟に至るまでの意識状態は、直感、直觀、直覺等に屬するもので、認識よりも感情的要素が多い。宗教的情緒よりも弱く、宗教的情操よりも特質があり、宗教的情趣に屬する性質である。意識内容も、心的對象も明確に自ら意

識せず、主觀客觀の差別も明瞭でない。表象によりて客觀化され易い性質になつて居る。悟の後の意識状態を自然現象



(天地山川草木、桃の花、松風の音、竹の響)か、人爲的對象(身體、器物、佛像、繪畫)によりて表現して居るが、其の表象は、表象其れ自身の意義を有するのではなく、自我感情を情趣象徵 *Stimmungs-symbolik* として、客觀化して居るのである。

三、悟を開く方法は三通りある。一は自學研鑽、實考實究である。二は自己の精神的素質と等しい師匠を訪ね、宗教的生活のあらゆる場合の宗教的體驗を積むことである(大多數はこの種類で、長い年月かゝり、多くは二、三十年を費して居る。第一圖参照)三は特殊の宗教的信仰儀禮について、多くの先輩、師匠を歴訪し、一種の標準的信仰型を構成直感することである(第二圖参照)。

(三〇) 熱田神宮の中世期的信仰

—附、熱田本地佛畫像について—

神宮皇學館講師 岡田 米夫

こゝに熱田神宮の中世期的信仰といふのは、平安朝から室町時代にかけて、神佛習合の影響を受けた熱田神宮の信仰をいふもので、その信仰の特徴としては、左の五點が挙げられる。

第一、平安朝には神佛混合はしてゐたが、それが發展して所謂本地佛を定める本地垂迹説を完成したのは、鎌倉時代に入つてからのことである。

第二、その本地垂跡説は眞言密教の大日五智如來の理論を借りたもので、これを當社の五座の御祭神に宛てはめて習合してゐるのである。

第三、本社の御主神を日本武尊とする古くからの説に對して、中世には天照大神をも、之に宛てる説が起きて來てゐる。

第四、中世になつて、神社信仰の中心となつた伊勢、熊野と相並ばうとする企圖が強調されてゐる。

第五、本社の神佛習合神道説は伊勢神道説の影響を受けた點の認められること等である。

右の思想信仰を裏書するものとして、今回新たに神宮徴古館から發見された鎌倉時代の筆になる熱田本地佛畫像を紹介し、併せてこれが有力な參考資料になることを述べたものである。

(三二) 眞言密教に於ける祈禱の國家的意義

高野山大學教授 大山 公 淳

祈禱は「絶對迷信なり」として排斥する一派の宗教もあるけれど、一般的に云へばそれは原始的宗教より高級な發展宗教に及ぶまで、全般を通じて重要な宗教行事の一と云ひ得られるであらう。

釋尊の教團に於いては、此の祈禱を唯、迷信として堅く禁ずる場合と、世の爲め人の爲め、佛陀の大慈悲を具現する限り、可とする場合との二様がある。その何れなるにせよ、佛陀の大慈悲を外にして發展し得べきものはない。祈禱を

可とするものも祈禱そのものを至上絶對とするのではなく、佛陀の大慈悲を實現する爲めの方法とするに外ならぬのである。祈禱が迷信であるか否かも此の立場を以て考へられねばならないと信するのである。

弘法大師の宗教中には祈禱的要素が多分にあるが、決してそれらは迷信的のものではなく、特にその祈禱は社會的國家的意義を十二分に包藏し、大師の立教開宗以來千百有餘年の歴史を通じて、現代猶その精神は襲踏され來つてゐる。けれど祈禱を單なる祈禱として終始し、社會國家の爲めに當然つくすべき業務を忘れるのは大師教徒の本領でないのである。此の意味に於いて現在の弘法大師を中心とする教團は、すべてに徹底しないと評されねばならぬ状態にある事を私は認める。

(三三) 神道に於ける祭祀の二大系統

國學院大學教授 佐伯有義

我が國は言挙げせぬ國である、不言實行の國である。故に神道も亦言挙げせず不言實行を主とする。是を以て儒教に所謂經典、佛敎に所謂經文といふやうなものはなく、其の思想は祭祀の上に實現せられて居る。それ故に神道に於ては祭祀は特に重要なものである。祭祀には皇室の祭祀あり、神宮の祭祀あり、官國幣社以下神社の祭祀あり、民間の祭祀あり、其の範圍は極めて廣汎であるが、之を大別すれば、(一)新嘗祭神今食の如く、神祇を請待し奉りて御饗みまひをせらるゝものと(二)神嘗祭を始め賀茂、春日、平野等諸祭の如く神祇の鎮坐し給ふ社頭に参り集まりて奉仕するものとの

二つに區別することが出来ると思ふ。依りて試みに二大系統に區別して説明をして見たのである。しかし時勢の變遷に連れて、今や既に滅びたものもありて、不明な點もあれど、古書に徴して其の一端を説明したのものもある。例へば神今食の如きは、古くは三度の御親祭の中に數へられ、新嘗祭と並び行はれたもので、幸に史料は存すれど、古くより祭祀の趣旨を説明した人がないものがあり、又國民一般に行うて居た宅神祭並に魂祭の如きは、今日は廢れて如何なる祭であつたか不明な點は多いが、古書に徴していさゝか考察を加へた。斯くの如く祭祀を類別して之を考察し、祭祀を通じて古神道の意義を明かにしたいと思つて、此の一篇を草したものである。

(三三三) 本邦教育の特長

布哇中央學院長 坂 井 末 吉

昔より教育上國家に重きを置くか國民たる個人に重きを置くかは重大な問題である。スパルタは國家教育であり、アテネは個人教育であつた。東洋に於ける儒教主義による教育は個人教育を省みない事はないが、主として國家教育であつた。日本に於ては、徳川時代は、儒教主義を採り、國のため個人を無くするといふ教育であつた。所が明治維新と共に、西洋の文明が押し寄せ來り、科學文明、個人主義思想、自由民權思想及び利用厚生思想が入つて來た。之等は皆個人の完成を目的とするもので、徳川三百年の團體としての教育に對し、對蹠的に相對立してをるものであつた。

近時は人格主義の教育が唱道せられる。人格とは其内容に、個人と國家とを含有するものとすのである。即ち個人

即國家で、其一致したものを人格と名付け、其完成を教育の理想となすのである。故に、私は教育の理想は人格教育の教ふる所であると思ふ。殊に我日本に於ては國家と國民と君主とは他國に見る事の出来ない密接な關係を有して居る。歴朝の詔勅の中に「義ハ君臣ニシテ情ハ猶父子ノ如シ」と仰せられた事實は我日本にのみあるのである。即ち我日本に於ては、皇室中心主義の教育、これが取りもなほさず人格教育であつて、日本人の目指して猛進すべき教育の理想であると信ずる。

(三四) 高木神に就て

東京帝大名譽教授
文學博士

白鳥庫吉

日本の神代にはタカミムスビの神の別名をタカギの神と呼んでゐるが、其の別名の原由に就ての定説は無い。私は之を漢字表現その儘に「高い木の神」と解釋する。そして又カミムスビの神と^{ウヰ}を成してゐる耦神であると信ずる。それは多くの御子神を産んでゐられるからである。祝詞では此二神をカムロギ、カムロミと稱するが、それは神の室の木である所のヒモロギと互に聯關を持つ。即ちタカミムスビの神は、高大なる靈樹を以て象徴せられる神であるが故に「高木神」と呼ばれるのであつて、アメノイハヤの場合には、アメノカグ山の神を以て代表せられ、天孫降臨の際には、神籬として此の葦原中つ國に持ち降られてゐるのである。

（三五） 天皇の御本質

文學博士 高 木 武

金甌無缺、萬國無比なる我が國體構成の根本中心であらせらるゝ萬世一系の 天皇の御本質は、大體に於て、次のやうであらせられる。

(1) 血族的國家組織の中心主腦、即ち「君」たる御立場で、國家統治の大權を行使して、完全に國家生活を統一し給ふ。

(2) 綜合的家族制度の族長、即ち「親」たる御立場で、血族的國家生活を統制し、人民を子として愛撫し給ふ。

(3) 道義を立國の大本としてゐる我が國の道德生活の模範的指導者、即ち「師」たる御立場で、御親ら徳を修め、模範を垂れて、國民を指導誘掖し、國家的全人格の完成を助成し給ふ。

(4) 現人神、即ち人にして「神」たる御立場で 天照大神の御延長として、絶對に尊嚴なる 皇位にあらせられ、國民の信仰崇敬の對象となり、神聖にして侵すべからざる神格を具へ給ふ。

隨つて、我が國に於ては、忠孝は一本より出で、忠君と愛國とが一致し、「君」「國」「民」が三位一體となりて協同親和し、最も合理的・理想的・自然的な國家生活が營まれてゐる。

(三六) 和歌の永遠性

御歌所寄人 武島 又次郎

短歌は日本の諸詩形の中で、發句に次で最も短小なる詩形である。而して世界各國の詩形と比べても、亦その最小なるものであるにかゝはらず、天然人生のあらゆる事象を歌ひ得て、其内容の變化に富める、又世界の韻文中、匹儔少きものであらう。この短歌はその具へたる優秀性によつて、日本の他の諸種の詩形を超越して、其の創作せらるゝ事各階級に互り、又年所を経るに従つて、其用語、修辭、聲調、體裁など、ますます練られ鍛へられ、整へられて、いかなる場合にも吟詠せらるべき柔軟性・適應性・萬能性を具ふにいたつたのである。

然るに現代に及んで、この短歌に對して、其形式、用語、聲調の上より現代性に缺けたりと云つて、短歌の改造をとなへ、もしくは、その滅亡さへ叫ぶものもあるやうであるが、しかしこれらはいづれも皮相の言説である。而して短歌は其本質より考へて、わが韻文界の特殊の一詩形として其永遠性を失はざるべきものと思ふ。

(三七) 神祇と城郭

神祇局考證官 鳥羽 正雄

神祇崇敬は日本の開闢以來、國史の中樞を形成する事實で、國史上如何なる事象も、それと無關係なものはないとい

つても過言ではない。その神祇崇敬も時代と場所と場合とによつて、種々異つた外貌を以てあらはれ、また他方面のこゝと交渉をもつてゐる。今、城郭の變遷と關聯した神祇崇敬の一面を回顧してみよう。城郭は各時代の政治・軍事・社會その他種々の方面の狀態の變遷によつて變遷してゐる。上代には今神籠石（Kogoshishi）といはれてその遺蹟を城郭の一種とみられてゐるものがあつた。これは、神を祀つた遺蹟であらうと一部の學者はいつてゐる。支那、朝鮮と外交上、軍事上、文化上の交渉が密接になつてくると（凡そ 640 A. D.）、帝都の形式的な防禦設備たる都城（Tojo）や、西南地方及び東北地方に、それぞれ異なつた形式の城（Jo）や柵（Saku）が築かれた。都城には、その守護神が特に崇敬され、邊境の城柵にはそれぞれの守護神が祀られた。但しこの時代は佛教が著しく流行してゐるので、佛教の方の武神も祀られた例がある。

その後武士が起つてから（凡そ 940—1800 A. D.）その館が發達して堅固壯大な城郭にまで發達したが、それらの城郭には必ず守護神が祀られた。それには城内最大の城櫓たる天守閣に祀つたものもあり、特に城内に神殿を建てて祀つたものもあつた。また城を中心として發達した都市一般に關しても、それぞれの守護神が祀られた。それ等の神々の中には、太古以來の武神もあるが、またその城の創業者や城主の祖先を祀つたものもあつた。封建制度時代の末期（凡そ 1800 A. D. 以後）に、歐米諸國の勢力が日本に接近するや、海岸の重要地に砲臺を築いて警戒したが、この際にも、神道の長官と自稱してゐた吉田家から將軍の政府へ、それらの砲臺へ海岸防禦の神を祀つたらよからうと進言してゐる。

明治維新で、封建諸侯は領地とともに城を朝廷へ獻上し、封建諸侯の城は大部分不要となつて破壊されたが、それ等の跡へは、その城と關係の深かつた舊城主の先祖や、忠臣や愛國者の神社が建てられて今日に及んでゐる。かくの如く

時代によつてその表面的且つ具體的な狀況は異なつてゐるが、そこに、日本の始から現在まで日本人の精神の奥底を貫き流れてゐる自分達日本人の祖先たる日本の神を崇敬し、あらゆる場合にその守護を仰いだ國民的信仰が觀られる。それが日本をして益々盛大ならしめる重要な日本人の精神と思ふ。

(三八) まつりごとの原義

國學院大學教授
文學博士

植木直一郎

政事又は政治を意味するマツリゴトの語が祭祀を意味するマツリの語と關係し、又、それらが神及び天皇に對する奉仕服従を意味するマツロフの語と聯絡することは事實である。そしてマツルの語の本義がマツ（待）に在るとする谷川士清コトシガの説は正しい。併しながら是等三個の語は、古い時代に於ては共に皆、専ら神に對する奉仕服従を意味したのであることを知らねばならぬ。神祇に對するものをマツリ（祭）、天皇に對し奉るものをマツリゴト（政）と言ひ別けるやうになつたのは後世に於ける語の分化である。「神を齋イソきマツル」と同じ用法によつて「天皇に仕へマツル」又は「御調ウツリマツル」と言つた古語を思ひ出して見るとよい。マツリゴトが對下的なるものとなつたのは更に後世の事であらう。

(三九) 末書と世相

臺北帝國大學教授

植松安

末書とは、或る原著が後世に増減變改される事に因つて其の價值を減じた書籍の意味に解するのが正しいと信ずる。

此の類の末書は文學書にも甚だ多く見られる。西洋文學に關しては、それがファウスト物語の Marlowe の “Doctor Faustus” に於て見られる。現に傳はつてゐる其れは、原著から遠く隔たつた末書的なものである。此事は同様に支那の元曲の一として有名な「西廂記」更に近世のものでは「紅樓夢」に於てさへも見られるが、我日本では「枕の草子」と「平家物語」に末書の最適例を發見するであらう。「枕の草子」は、清少納言の原作であるが、現に傳はつてゐるものには、原著者の書いた其のまゝのものを殆ど發見し得ないのである。「平家物語」も末書の多い事で有名である。私は斯の如く東西兩洋共に名著の末書が歡迎される事に世相の變遷を認めるのである。

祈年祭の歌

會員 桑 貞 彦

一、朝日直刺す瑞穂の國に

すめらみことの大御寶と

いそしみ勵む臣の子吾等

今日の吉き日に御祭治め

祈りを籠めて田作り始む

明き心を諾ひ給へ

二、天つ御祖の授けましつる

稻穂つたへて民草茂る

豊葦原に雨風地震の

荒びあらせずなりはひ守り

めでたき御代の榮もしるく 田の面洽く穰らせ給へ